

## サムエル記第一 (1)

### 「サムエルの家族」

1 サム 1 : 1~8

#### 1. はじめに

(1) 本来は、サムエル記第一と第二は、「サムエル記」という一書である。

①七十人訳が便宜的に第一と第二に分け、その区分が定着した。

(2) 著者に関しては、3つの可能性が考えられる。

①1 サム 1 : 1~24 : 22 までサムエルが書いた可能性がある。

\*1 サム 25 : 1 で、サムエルは死ぬ。

②サムエルのもとで学んだ預言者の1人が、まとめた可能性もある。

\*その場合、サムエルが書き残した資料を利用したと思われる。

③祭司エブヤタルが、資料をまとめた可能性もある。

\*ダビデと行動をともにした人物 (1 サム 22 : 20~23 参照)

(3) 本書の内容

①サムエル記全体は、前 1120 年頃から約 150 年間の出来事を記している。

\*サムエル→サウル→ダビデ初期

②士師記の時代 (混乱した時代) が約 300 年間続いた。

③国が崩壊の危機に直面したとき、神の介入があった。

④イスラエルの民が王を求めたことにより、王政が始まる。

#### 2. 文脈の確認

##### I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

##### A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)

1. サムエルの家族 (1 : 1~8)

2. ハンナの祈り (1 : 9~18)

3. サムエルの誕生 (1 : 19~28)

#### 3. 注目すべき点

(1) 士師記の時代の末期、イスラエルは政治的にも霊的にも、混乱状態にあった。

(2) 新しい時代を導くのは、預言者サムエルである。

(3) 冒頭で、サムエル誕生の経緯が紹介される。

命題：神の御業は、取るに足りないことから始まる。

取るに足りない3つの出来事を見ると、それが分かる。

## I. 無名の人エルカナ (1 節)

### 1. 1 節

1Sa1:1 エフライムの山地ラマタイム出身のツフ人の一人で、その名をエルカナという人がいた。この人はエロハムの子で、エロハムはエリフの子、エリフはトフの子、トフはエフライム人ツフの子であった。

(1) ダビデ王国に至る大河の源流が記される。

(ILL) スメタナの『モルダウ』は、チェコの川を描いた交響詩。

小さな泉から水が流れ出す様子が、弦楽器と木管楽器で奏でられる。

①サムエル記も、小さな流れから始まる。

### (2) エルカナの家系

①ラマタイム (二つの高地) は、ラマ (1:19) と同じ。

②エルカナは、実際はレビ人である (1 歴 6:33~38)。

\*エフライムの領地に住むレビ人である。

③エルカナは「神が買い取られた」という意味。

④この家系からサムエルが出る。

⑤サムエルは、サウルとダビデに油を注ぐことになる。

### (3) 教訓

①偉大な神の業は、無名の一人の人から始まる。

②神の主権の下に置かれた一人の人を軽視してはならない。

③私たちにも、神から委ねられた使命がある。

## II. 不妊の女ハンナ (2~3 節)

### 1. 2 節

1Sa1:2 エルカナには二人の妻がいた。一人の名はハンナといい、もう一人の名はペニンナといた。ペニンナには子がいたが、ハンナには子がいなかった。

(1) エルカナの二人の妻

①ハンナ (1 番目) : 恵み、好意という意味。

②ペニンナ (2 番目) : 宝石、真珠という意味。

(2) キアズム (ABBA)

①ペニンナには子どもがあった。

②ハンナには子どもがなかった。

- ③焦点はハンナにあり、物語の中心人物となることが示唆される。
- (3) ハンナが不妊だったので、ペニンナが側室になった可能性が高い。
  - ①聖書は、一夫多妻制を規定する（申 21：15）が、肯定はしない。
  - ②一夫多妻制は、不和や争いの原因になる（アブラハム、ヤコブの例）。
- (4) 恵まれた女に子がいないという現実をどう理解するか。
  - ①神の働きの余地がある。
  - ②サラ、リベカ、ラケル、マノアの妻（サムソンの母）、エリサベツ

## 2. 3 節

1Sa 1:3 この人は、毎年自分の町から上って行き、シロで万軍の【主】を礼拝し、いけにえを献げることにしていた。そこでは、エリの二人の息子、ホフニとピネハスが【主】の祭司をしていた。

- (1) エルカナは、旧約的な意味での義人である。
  - ①毎年、シロに上って、万軍の【主】を礼拝し、いけにえを献げていた。
  - ②申 16：16 に巡礼祭の規定がある（年に3度）。
  - ③当時、幕屋はシロにあった（ヨシ 18：1）。
  - ④「上る」は、物理的に高地に行くことであるが、霊的行為も意味する。
- (2) 「万軍の【主】」(יהוה צבאות) は、ここで初めて出てくる。
  - ①天の軍団の統率者。圧倒的な権威と力を持つ戦いの【主】。
  - ②この御名は、預言書では頻繁に出てくる。
  - ③ハンナの祈りは、万軍の【主】に向けた祈りである。
  - ④【主】は、ハンナ個人の悩みと、イスラエル全体の問題を解決される。
- (3) エリの二人の息子ホフニとピネハスが祭司として奉仕をしていた。
  - ①彼らは、霊的に墮落していた。
- (4) 教訓
  - ①墮落した環境の中でも、個人が誠実に神を求めることは可能である。
  - ②万軍の【主】の権威と力に焦点を合わせることが、礼拝の鍵となる。
  - ③私たちが見上げている神は、どのようなお方か。

## III. 家庭の不和（4～8 節）

## 1. 4 節

1Sa 1:4 そのようなある日、エルカナはいけにえを献げた。彼は、妻のペニンナ、そして彼女のすべての息子、娘たちに、それぞれの受ける分を与えるようにしていたが、

(1) 「ある日になったとき」＝いけにえを献げる特別な日

- ①エルカナにとっては、喜びの日、厳粛な日である。
- ②彼は、律法に従って、いけにえを献げた。
- ③家族を霊的儀式に参加させた。

(ILL) 元旦での父親のスピーチ（祭司的役割）

(2) 妻のペニンナに、分け前（取り分）を与えた。

- ①これは、祭儀で分配される肉の部分である。
- ②彼女のすべての息子、娘たちに、それぞれの受ける分を与えるようにしていた。
- ③エルカナは、家族への責任を果たしていた。
- ④通常の分け前を与えていた。

\*ハンナへの偏った愛情を際立たせるための布石

## 2. 5 節

1Sa 1:5 ハンナには特別の受ける分を与えていた。【主】は彼女の胎を閉じておられたが、彼がハンナを愛していたからである。

(1) ペニンナとハンナの対比

- ①ハンナには、特別な割り当て（二倍の分け前）与えていた。

\*量的にも質的にも特別な割り当て

- ②なぜなら、彼はハンナを愛していたから。
- ③語順に注意。しかし、【主】は彼女の胎を閉じておられた。

(2) 教訓

- ①ここには、人間の愛と神の主権の葛藤が見られる。
- ②ハンナの葛藤は、信仰の逆転劇の序章である。

## 3. 6 節

1Sa 1:6 また、彼女に敵対するペニンナは、【主】がハンナの胎を閉じておられたことで、彼女をひどく苛立たせ、その怒りをかき立てた。

(1) ペニンナは、わざと挑発的なことばや態度で、ハンナを苦しめた。

- ①動機の根源には、【主】がハンナの胎を閉ざしていたという事実がある。
- ②表面的には祝福を受けているが、その態度と動機は御心に反する。

(2) 教訓

- ①ペニンナのような存在は、信仰者の信仰を純化する道具となる。

4. 7 節

1Sa 1:7 そのようなことが毎年行われ、ハンナが【主】の家に上って行くたびに、ペニンナは彼女の怒りをかき立てるのだった。こういうわけで、ハンナは泣いて、食事をしようとしなかった。

- (1) この苦しみは、継続的な、年中行事のたびに繰り返されるものであった。

- ①エルカナは、【主】の家に上ることをくり返していた。
- ②ハンナは、霊的な期待感を持って【主】の家に上って行った。
- ③しかし、ペニンナのいじめによって、礼拝の場は苦痛の場となった。
- ④ハンナは、泣いて、食事をしようとしなかった。
- ⑤神との出会いを求める魂の叫びが見られる。

(2) 教訓

- ①信仰者が神に近づこうとすると、サタンが妨害をしかけてくる。
- ②私たちにとっても、礼拝の場は霊的戦いの場である。

5. 8 節

1Sa 1:8 夫エルカナは彼女に言った。「ハンナ、なぜ泣いているのか。どうして食べないのか。どうして、あなたの心は苦しんでいるのか。あなたにとって、私は十人の息子以上の者ではないか。」

- (1) エルカナの4つの疑問

- ①なぜ泣くのか？（感情）
- ②なぜ食べないのか？（肉体）
- ③なぜ心が痛むのか？（霊）
- ④私はあなたにとって十人の息子よりましではないか？（関係）

- (2) エルカナはハンナを思いやっているが、根本的な理解に欠けている。

- ①ハンナの苦しみは、「子がいないこと」以上に、霊的なものであった。
- ②神を信じているが、神の沈黙に苦しんでいるという信仰者に特有の経験
- ③夫のことばをきっかけに、神に直接訴える道を選ぶことになる。

(3) 教訓

- ①神の沈黙は、信仰者の内に真実な祈りを生み出す。
- ②ハンナの祈りは、「痛みの祈りから、請願の祈りに」転換する。

結論：今日の信者への適用

- 1. 神のわざは、小さなことから始まる。
  - (1) キリストにある自分を過小評価してはならない。
  
- 2. 不遇は、神の計画の一部であることが多い。
  - (1) 遅れてくる答えは、想像を超える祝福をもたらす。
  
- 3. 万軍の【主】は、無名の人々の祈りを聞いてくださる。
  - (1) 祈りの力を軽視してはならない。